

桃 と 菊 と

——『枕』と『源氏』との間——

上 坂 信 男

一例を挙げることから始めよう。

三月三日・うら／＼のと・かにてりたる・・・・・もゝの花
 のは・・・・・はしまさきはしむる・
 ・・・・・めたる云々

能因本や三巻本の系統で第三段の一節である。『春曙抄』の指摘するように、「桃花王潤に生じ、柳葉全溝に暗し」という『事文類聚』の詩句などに影響を受けた記述かも知れないが、また「上にさぶらふ御猫は」の段で、例の翁丸が昨日に変わって苛責追放されたあとで、「あはれいみじうゆるぎありきつるものを。三月三日、頭の弁の柳のかづらせさせ、桃の花をかざしにさせ、桜腰にさしなどして云々」と同情の念をもって想い起している条から窺えるように、現実には賞翫した桃の花に対する作者の親近感を伝えているとも思われる。

春三月、桃の花を賞美したのは清少納言だけではなく、曲水の宴に桃が添えられたのは史実に明らかで、したがって、平安貴族

の春の生活に桃が浸潤していたことは十分に想察できる。にもかかわらず、桃の花の美しさは和歌の素材としないか、少くとも勅撰和歌の対象としないのが、このころまでの伝統的姿勢であったようである。

『古事記』においては「取_レ在_二其坂本_一桃子三箇_二待擊者悉逃返也_一」とあるように、桃の実を投げて伊弉諾尊は黄泉国から逃げて来るのであって、この神話で重要な役割を果たすのは桃の実であって花ではない。中国伝来の、桃の実を除災の効があるとの伝承が生きているからであろうか、「神代紀」に「時道辺有_二天桃樹_一：此用_二桃避_一鬼之縁也」というときも同じであろう。『万葉集』においては、

春の苑紅にはふ桃の花下照る道に出で立つをとめ（四一三九）
 が、かつて茂吉がいい、近く小島憲之博士が「歌の内容からみて、中国の桃花春園の娘子を連想させる云々」（『古代日本文学与中国文学』中巻九四六頁）といわれるように、あるいはこれも既に指摘されているように、正倉院御物の樹下美人図などに着想を得た、いわば外国種の歌であるにしても、一応は、桃花紅に咲く

實際を背景にしているといつてよからう。「はしきやし吾家の毛桃本しげみ花のみ咲きてならざらめやも」(一三五八)「わが屋前の毛桃の下に月夜さし下心よしうたてこのごろ」(一八八九)の二首は毛桃すなわち細かい毛の生えているところから毛桃ともいう桃の実を主題としたものであるし、「桃の花紅色にほひたる面わのうちに青柳の細き眉根を咲みまがり朝影見つつをとめらが」(四一九二)は明らかに「翠根開眉色、紅桃乱臉新」という『遊仙窟』の表現に想を得た(小島博士前掲書九四七頁)比喩表現であつて当面の課題から外れるが、いずれにしても、『万葉』の桃の歌は桃の花がすでにわが國に伝来し、咲いていたことを証し立てる。

ともあれ、花そのものの美しさを感じを通して捉え、詠み挙げるとは、記紀万葉の世界において乏しく、平安時代に入つてもこの傾向はつづく。

『古今集』と、それに続く『後撰集』には桃の歌はない。『拾遺集』では、巻五賀の部に、

亭子院歌合に

みつね

みちとせになるてふもゝのことしより花咲くはるにあひにけるかな

(二八八)

巻十六 雑春に、

題しらず

よみ人しらず

さきしとき猶こそ見しかももの花ちればをしくもおもひなりぬる

(一〇三〇)

がそれぞれみられるが、前者は西王母伝説を下敷にした作品であ

り、後者は桃を詠んでいるようだが、春の部に入れず、雑春に収めているところを見ると、純粹に季の風物として桃花の美を歌つたものとは、少くとも撰者は認めていなかったのであらう。だから、桃の存在を証明する材料になつても、桃の頌歌とは言えない。下つて『後拾遺集』になつて、初めて 春の部立(巻二)に、

三月三日もゝの花を御覧じて 花山院御製

みちよへてなりけるものをなどてかはももしもはたながめそめけん

(一二八)

天曆御時の御屏風に、桃の花有りける所をよめる

清原元輔

あかざらばちよまでかざせもゝの花々もかはらじ春も絶えねば

(一二九)

世尊寺のもゝの花をよめる 出羽弁

ふるさとの花の物いふ世なりせばいかにむかしのことをとはまし

(一三〇)

と採られ、一二八は西王母伝説を、一三〇は「桃李不言、下自成蹊」の故事をそれぞれ下に敷いているにしても、そしてまた一二九が屏風歌であるにしても、桃の讃歌が出て来るわけである。

このように、勅撰集を辿つてみても、梅桜に比して桃の冷遇されていることが分るのだが、私家集や私撰集について検しても同じことが言える。『古今六帖』に採られる桃の三首は、桜の山桜庭桜をも含めた六十七首、紅梅を含めた梅の三十首に比べるまでもなく比率の低いものである。その因は、その三首が悉く『万葉』歌であることから分るように、当代において桃の歌の渺なかつ

たことが何よりの理由であらう。私家集においても梅や桜に比べて桃の歌の極めて少いことがそれを証明してくれる。

三月三日あるところにてかはらけとりて（享子院のうた合とも）

みちよへてなるといふもはことしよりはなさくはるになりぞしにける（忠岑集）

もゝおなじ（享子院）哥合に

みちとせになるとふもゝのことしよりはなさくはるにあひにけるかな（是則集）

内御屏風八でうが和歌

みちとせにひらくるもゝのはなさかりあまたのはるはきみのみぞみむ（兼盛集）

又、三月三日もゝのはなおそくはべりけるとし

わがやどに今日をもしらぬもゝのはなはなもすゝむははゆるさ
らけり（同）

桃花すける人のうちあひてあるをみて

人しれずゝくとはきけどもゝのはな色にいでゝは今日ぞ見えける（重之集）

などを『枕草子』時代までに拾うことができる程度なのである。

見て分るように、ここでも西王母伝説を踏まえ、あるいは屏風歌であって、ややまとともに桃の花を詠んだかにみえるのは、俳諧の気味があるが、重之の所詠だけである。

およそ、桃の花が和歌の世界で重んじられなかったということ
は、『和漢朗詠集』で、『三月三日』の項の付けたりとして収めら

れていることにも知れる。

38 春來遍是桃花水。不升仙源何処尋。

39 春之暮月々之三朝。天醉于花桃李盛也。

40 煙霞遠近応同戸。桃李浅深似勸盃。

というように、王右丞集（38）から、あるいは菅家の作品から採っているものは、三月三日曲水宴に絡まるものであり、「桃始めて華咲く」と題する作品が『本朝文粹』から採られている（43）のが唯一の桃を主題とした詩句であり、和歌では「三千年になる」といふ桃のことしより花さく春にあひそめにけり」という前引歌が一首採られているだけなのである。

翻って、唐詩において如何に扱われているかとみると、『白楽天詩集』だけでも、

彭蠡湖晚歸（卷十六）

彭蠡湖天晚。桃花水氣春。鳥飛子白点。日没半紅輪。何必為遷客。無勞是病身。但來臨此望。少有示愁人。

とあるのをはじめ、「桃花水色渾」（卷十七）「送友人上峽東川辟命」とか、「松灣隨櫂月。桃浦落船花」（後集卷九）とか、

「桃飄火焰々。梨落雪漠々」（後集卷一）「落花」とか、枚挙にいとまないほどで、要するに、桃の花の美は中国詩の世界の風物として確固たる心象を与えられ、この詩材としての普及が、『万葉集』歌人の舶来趣味には迎えられたが、遂に歌材としては余り重く扱われなくなったのではないかと思われる。

ところで、ここに興味深い事実は、歌材としては扱われることの稀であった桃の花が、この節の冒頭に引用したように、『枕草

子』ではその美を認められていたらしいのに、『源氏物語』ではついに一度も、背景として描かれることはもとより、比喩に用いられることもなかった、という事実である。性急に、兩作品作者の和歌に対する態度を云々にするのではないが、『源氏物語』における和歌の浸潤を当座の興味の対象としている私には、看過できない事実で、本稿執筆の動機の一つもここにある。今しばらく、事実を検しよう。

今、『古今六帖』をみるに、『万葉集』からだけ採歌している項目の少くないことを知る。山菅や茅花もその例である。

特に取り立てる程のこともないような草だが、「雪の山」の段には、

御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに頭などをつゝみて、山橋、日かげ、山菅などうつくしげに飾りて御文はなし。云々

とあって、山菅は当時の宮廷生活にも入り込んでいたことが知れ、従って、「草は」の段で取り上げられているのももっともと思われる。ところが、この山菅が『万葉』では多く詠まれ、その十首が『六帖』に収められているというのに、当代勅撰集には殆ど所見がなく、『源氏物語』にも遂に現われていない。

『六帖』に採られている「すげ」の歌は、

あしひきの山におひたるすがのねのねごろみまくほしき君かな

みわたせばみもろの山のいははすげしのびに我はかたおもひする

おくやまのいはもとすげのねふかくもおもほゆるかも我おもひつまは

のように、恋愛相聞の情を詠むのに比喩的に利用されているものが多く、宮廷生活に入り込んでると同時に、こうした土くさい比喩がかえって新鮮なものとして清少納言の興味を誘ったのかも知れない。その反面、この土くささが、『源氏』作者を含めて王朝貴族一般の好尚に合わなかったのかも知れない。

「草は」の段で「茅花もをかし」（三卷本）とか「茅花いとをかし」（能因本、前田本）とか記される「つばな」が扱われるのは、『枕草子』でもこの一か所だけが、『源氏』に所見がなく、和歌では『万葉』に、

君がためわがてもすまにはるののにぬけるつばなぞくひてこえませ

我君にけぬはこふらしたまひつるつばなをくへどいややせにやす

つばなつむあさちが原のつばすみれいまさかりなりわがこふらくは

という三首が『六帖』に採られているが、いずれ食用に供されたことが分り、特に前二者は、鰻の歌と同様、ユーモラスな贈答歌で、このユーモラスな歌の思い出が、新鮮に光る和毛の感触とともに、「をかし」「いとをかし」の情をかき立てたのだらうか。ところがこれまた『源氏』には出て来ないのである。

つきには、前節の傾向を裏面から証明する事実——『源氏物語』に多く用いられて、『枕草子』には多く用いられない風物——の若干をみよう。文芸形態も異なるうえに、全体量が『源氏』と『枕』とでは数倍の差があるのだから使用の頻度数だけでは比較の意味をなさないかも知れない。それで、今ここに取上げようと思う菊や女郎花やなどなどのばあい、如何なるときに役立てられているかを検べることになる。自然の風物としての菊は、

1 菊いと面白くうつろひ渡りて、風にきはへる紅葉のみだれなど、あはれとげに見えたり。(帚木)

2 菊の花、濃き淡き紅葉など折り散らしたるもはかなけれど云々。(賢木)

3 冬の初め、朝霜結ぶべき菊の籬、われは顔なる杵原。をさく名も知らぬ深山木どもの、木深きなどを移し植ゑたり。

(少女)

4 老を忘るる菊に、おとろへゆく藤袴、ものげなき地榆などは云々。(匂宮)

などと、3、4、は六条院の明石御方の庭や匂宮の好みを述べる条、1は馬頭の体験談に述べられた木枯女の家の子でであり、2は源氏が伯父の律師を訪ねた雲林院で関伽奉る僧の様子である。

こうした菊の心象は当時の和歌に詠まれるものとはば重なり、4の老を忘るるものとしての菊は後に触れる着せ綿とも絡むが、行幸近いある朝の土御門邸を詠めた『紫式部日記』の一節——よにおもしろき菊の根を尋ねつつ掘りて参る。色々移ろひたるも、

黄なるが見どころあるも、さま／＼に植ゑたたるも、朝霧の絶間に見わたしたるは、げに老いもしぞぎぬべき心地するに、云々——なども思出され、「露ながら折てかざさん菊の花老いせぬ秋の久しかるべく」(二七〇)との『古今』歌や「しづくもてよはひのぶてふ花なれば千世の秋にそ陰はしけらん」(四三三)との『後撰』歌などに詠まれているところと重なるのであるし、3の霜結ぶ籬の菊も、例の躬恒の有名な「初霜の置きまどはせる白菊の花」(二七七)の『古今』歌以来詠みなれた歌材であり、1のばあいは『後拾遺集』にみえる

いもうとに侍りける人のもとに男来ずなりにければ、九月ばかりに、菊の移ろひて侍りけるを見てよめる

良遍法師

しらきくのうつろひ行そ哀なるかくしつこそ人もかれしか

相模公資に忘れられて後、かれが家にまかれりけるに、移ろ

ひたる菊の侍ければよめる 藤原経衡

うへをきし人の心は白菊の花よりさきに移ろひにけり

五条なる所にわたりて侍けるに幼なき子とも菊をもてあそ

びければよめる

中納言定頼

我のみやかゝると思へばふるさとの籬の菊もうつろひにけりと続く(三五五〜七)の歌とは何かの関連があらうかと思われるほど、状況と発想の類似がある。良遍法師や定頼やらの生存年代が紫式部と平行するものと思われるから、いわゆる源泉影響の關係ではなく、同時代人の間の趣味の共通性とみるべきだろう。

当時の生活に密着浸透した菊の心象としては、つぎのようなも

のがある。

菊はやはり重陽の宴に関係が深く、その添景として、「九日の宴にまづ難き詩の心を思ひめぐらし、暇なき折に、菊の露をかこちよせなどやうのつきなきいとなみにあはせ云々」(帶木)とあり、「九月になりて九日、綿おほひたる菊を御覧じて、もろともに置きあひし菊の朝露も云々」と着せ綿をみるにつけても亡き紫上が忍ばれるという源氏の歌(「幻」)もある。

より日常的なものとして、「菊の気色ばめる枝に濃き青鈍の紙なる文」をつけて寄越した六条御息所から源氏宛のばあいのように文につけに用いる例(「葵」)や、「菊のいとおもしろくうつるひたるを賜はせて、浅緑若葉の菊を露にしても云々」と夕霧が贈り「二葉より名だたる園の菊なれば云々」と大輔の乳母が返すような(「少女」)、又、「主人の院菊を折らせ給ひて、青海波の折を思し出」で、「色まさる籬の菊云々」「むらさきの雲にまがへる菊の花濁りなき世の星かとぞ見る」と源氏と太政大臣が贈答するばあいのように、矚目の風物として歌の贈答に利用されることもある。この太政大臣の「むらさきの云々」の歌は、すでに指摘されているように、『古今集』(28)の「久方の雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける」との敏行朝臣の歌を踏まえたものであろう。さらに、散り過ぎた挿頭の紅葉にさしかへて、「御前なる菊を折」って舞う(「紅葉賀」)こともあれば、勾宮と中君と会奏の折の唱歌の具に「いと見どころありて移ろひたる」菊を折ることもある。時には「お前の菊うつろひ果てで盛りなる頃」に、「霜にあへず枯れにし園の菊なれどのこりの色はあせずもあるか

な」と帝が菊にこと寄せて薫に女二の宮を許す意中を示すのに用いられていることもある。要するに、こうした多方面での利用をみると、『源氏物語』の作者にとって、菊という植物は延命の伝承とともに九月九日重陽の宴を飾る舶来の花としての意味も少なくはないが、すでに普及し生活に密着してものとして感覚的にも賞美されていたことが分る。およそ「菊」は平安初期に輸入されたからであろうが、『万葉』には一首も見当らず、平安時代に入ってから多く詠まれ、勅撰集にも多く採録されていることから、『源氏』において菊の多く利用されていることは、作者紫式部の個人的感覚を尺度に摂り入れられたというよりは、勅撰和歌の素材としての粹と重なることに保証を得ての摂取と思われる。そのことは、菊を詠んだ『古今』の「心あてに折らばや折らん云々」、『後撰』の「何にきく色そめかへし云々」の歌句をそれぞれに「心あてにそれかとぞ見る云々」(夕顔)、「わが宿は花もてはやす人もなし云々」(「幻」)と、原歌の菊を夕顔や梅に置き換えて流用するのにも通じて、作者の和歌への親近の態度によるものといえることができる。

他方、『枕草子』に扱われる菊は、「正月一日云々」の五節句の天象を述べる段で、

九月九日は、晩方より雨少々降りて、菊の露もこちたく、おほひたる綿などもいたく濡れ、うつしの香ももてはやされて、つとめてはやみにたれど云々

とか、「節は五月にしく月はなし云々」の段で、

九月九日の菊をあやしき生絹の衣に包みて参らせたるを、同

じ柱にゆひつけて、月頃ある薬玉にときかへてぞ棄つめる。

また、薬玉は、菊のをりまであるべきにやあらむ。云々とかあって、九日の宴なり何なり、節会と関連して捉えられ、見も知らぬ草を持って来た子どもに、その名を尋ねても答ええないので、「耳無草となむ言ふ」などとかからなかったとき、

またいとをかしげなる菊の生ひ出でたるを持て来たれば、摘めどなほ耳無草こそあはれなれあまたしあればきく（菊―聞く）もありけり

と言はまほしけれど、またこれも聞き入るべうもあらず。と、掛詞の興味とともに記したのも、「七日の日の若菜」を持て来たときのことであった。

天然に咲く菊の美しさについてはどの程度認めていたものであろうか。「草の花は」の段で、「女郎花、桔梗、朝顔、刈萱、菊、壺すみれ」と列記されているのが、僅かにその証となる程度である。要するに、『源氏物語』で質量ともに多面的に扱われた菊の花が、『枕草子』では僅かに四例しかないのは、歌材として大いにもてはやされた菊の花に対する両者の姿勢が相異として著しいものであり、そのまま勅撰和歌に対する両者の姿勢の相異として、前節にみた桃の花のばあいと無関係でないだろう。

類例として、女郎花を挙げよう。

『源氏物語事典』該項の筆者（待井・石田両氏）も「下の例、ほとんど例外なく」をみなへし、女にたとへてよむべし」（能因歌枕）とある用法である。」としているように、十四例ある『源氏物語』中の女郎花は、和歌的心象によるものである。『万葉集』

には、

手にとれば袖さへにほふをみなへしこの下露に散らまく惜しものように、何の寓するところもなく女郎花を詠んだ歌があるが、勅撰集になると、例の「名にめでて折れるばかりぞ女郎花」の遍昭の歌のように、女性を連想させる詠み口のものが多い。ところが、『枕草子』では前にも引いたように「草の花は」の段で、名前を挙げられるほかには、「野分の又の日こそ」の段で、

大きな木どもも倒れ、枝など吹折られたるが、萩・女郎花などの上によるこびひ伏せるいと思はずなり。

と単なる叙景の一部として扱われるだけである。

山吹のばあいも類例とみてよからう。『源氏物語』で扱われる山吹については別に述べたこともある（武蔵野文学所収拙稿「幻巻私注抄」）が要するに、玉鬘に対する譬喩の用法も含めて、山吹を宿に植ゑてはみることに思ひはやまず恋こそまされの『万葉』歌から、

あぢきなく思ひこそやれつれづれひとりやゐでの山吹の花の和泉式部の歌（『後拾遺』所収）に至る和歌の世界の伝統的心象に基づいているらしいのに、『枕草子』では、「草の花は」の段で「八重山吹」（三巻本）、「大きにてよきもの」の段で、「山吹の花」とそれぞれ記され、「花の色はこからねどさく山吹云々」との能因本の本文を加えても、そうした和歌的心象とは余り関係ないところで山吹をみているようだ。「殿などのおはしまさで後」の段で、里居する清少のもとに、「例ならず御言などもなくて日頃になれば、心細くして打詠むる程に長女文持て来たり。」その

文は、紙には一字もなく、山吹の花びら一重を包んで「言はで思ふぞ」を書いてあった、という話など、後にも触れるが、花そのものよりは、山吹の花にまつわる当時の情趣深い生活が反映しているだけである。

こうした例は草の花ばかりではなく、螢など虫の用例からも言えるようである。詳細は別稿に譲りたいが『万葉』では「螢なす」という枕詞一例しか見出されない螢だが、勅撰和歌集の時代に入ると多く詠まれるようになる。『枕草子』では初段、

夏は夜 螢の多く飛びちがひたる

と「虫は」の段で「螢」と挙げられているだけである。『源氏物語』の螢が十例に及んで、漢詩のあるいは和歌の心象と重なり合うようにして利用されているのは前述した諸例と併せ考えるとときに興味深いものがある。

三

『源氏物語』の世界が平安人士の和歌の世界と重なり会うところに成り立っていることについては、これまでも幾つかの稿で述べたことであったが、本稿前々節にみたところも、その点では共通の結論を得ることができる。

ただ本稿は『枕草子』との対比という方法を選んだがために、『枕草子』の側について今少し触れなければならない。

これまでに、『枕草子』について、例えば初段を例にして「和歌的なものに対する一種の対抗的姿勢」を指摘されたことがあった（鈴木知太郎博士「随想段の鑑賞」『枕草子必携』所収）。私も

『枕草子』の作者が、勅撰和歌の枠を乗り越えようとしている傾向を説明できる幾つかの事例を挙げてみた。ところで、跋文はこうした作者の意図を一層明確に示してくれるはずであるから、跋文をめぐって如上の私見に基づく試解を示そう。

この草子、目に見え、心に思ふ事を、人やは見んとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなう、人のために便なきいひ過ぐしもしつべき所々もあれば、ようかくし置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。

宮の御前に、内の大臣のたてまつりたまへりけるを、「これになにを書かまし。上の御前には史記といふ書をなん書かせたまへる」などのたまはせしを、「枕にこそは待らめ」と申ししかば、「さは、得てよ」とて賜はせたりしを、あやしきを、こよやなにやと尽きせずおほかる紙を書き尽さんとせしに、いと物覚えぬ事ぞおほかるや。

おほかた、これは世の中にかしきこと、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌などをも、木草鳥虫をも言ひ出だしたらばこそ「思ふほどよりはわろし。心見えなり」とそしられめ、たゞ心一つに、おのづから思ふ事をたはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに、「恥づかしき」なんども見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞあるや。げに、そもことわり、人のにくむをよしと言ひ、ほむるをもあしといふ人は、心のほどこそおしはかるれ。たゞ、人に見えけん

ぞねたき。

周知の跋文の一部である。

「目に見え、心に思ふ事」を書き綴ったゆえに、この作品が随想隨筆である、とはこれまでも言われてきたところだが、岸上慎二博士は一步を進めて、「こういう自分の体験を他人に見られることを考えないでする著作である」とすると、今日の文学ジャンルからは『日記』とほとんど変わりが無い。云々」と言及された（『枕草子序説』——『枕草子必携』所収）。が、これは「人やは見んとする」に力点を置いての説明であって、日記的節段の説明には有効なことであるが、「目に見え心に思ふこと」に焦点を合わせれば、「心に思ふ事を見る物聞く物につけて言ひ出せるなり」との例の『古今集』仮名序を引き合いに出すまでもなく、これは本来和歌で表現されるのが常であるものを、勅撰和歌の伝統の枠を超える内容なるがゆえに、散文で執筆したことを暗々裡に語っているのではないだろうか。「目に見え心に思ふ事」をことばに表わすのは、日常の会話であり、文芸とすれば、日常性横溢する、いわゆる發の歌と称するものの機能であつたはずである。それを散文の機能に頼って書き表わしたのは、「目に見え心に思ふ事」を記す抒情の段階から進んで、何事かを説明しないではいられない精神構造を根底としたからであらう。とすると、前節までに一斑を見てきた『枕草子』の作品形成の精神構造ないしは文芸上の姿勢に共通するものが、ここに示されているということができると思う。この点は「とりどころなきもの」の段で「……この草子を人の見るべきものとは思はざりしかばあやしきことも、に

くきことも、ただ思ふことを書かむと思ひしなり。」といっているのも同断である。

述べたような理解のもとに、改めて、ここに引用の一文を丹念に読み直すと、「あいなう人のために便なきいひ過ぐしもしつべき所々もあれば」とあるから——能因本系は「所々など」——人のために書き過ぎたところもあるけれど、人々には何の迷惑もかけない——と作者が思っている——部分もあつたわけである。「あいなう云々」は挿入句をなしていて、「その上」とでも補って訳すべき文脈と思われる。他方、その前の、「人やは見んとすると思ひて」は「書き集めたるを」にかかるとみて誤りなからうから、「目に見え心に思ふ事」をなぜ他見を憚って「つれづれなる里居のほどに書き集め」なければならなかったのか、との疑念を抱かざるを得ないのである。その中に、「人のために便なきいひ過ぐしもしつべき所々もある」からであらうけれど、それが理由のすべてだろうか。言つたように、本来なら和歌で現わすべきところを、散文で表わしている、ということの意識が強かつたことをも理由の一つに数え上げるべきではないか、と私は思うのである。

そのように解することが許されるならば、跋文解釈に都合のよいことが多いと思う。「枕にこそは侍らめ」については旧来諸説があるけれど、身辺雑記の意味に受け取ったからこそ、皇后様は在来の歌枕類でなくて、日記記録の類あるいは、後世にいわれる隨筆という、いずれにしても仮名散文の作品を期待し、定子と中関白家をめぐっての、如何ばかり興味深い記録を作ってくれるかと思つて、「さば得てよ」と直ちに下賜なさつたのであらう。『史

記』に対する「枕」の洒落がどのように説明されようと、それだけの機智で下賜されるだろうか。また、機智をめでて賜ったと思つて、このように書き留めているのだとしたら、清少納言は随分自惚の強い女ということになりはしないだろうか。実際に、この作品の悉くの段がそれほどの機智に満たされているわけではないのであつて、そのことは作者自身誰よりも承知していたはずである。むしろ、定子に限らずその後宮の者皆が、定子後宮の記念碑的記録を求めていたのではなかったのだろうか。望郷の念やみ難い一行が、それぞれの心の表面を「昔男」の詠作に期待して自らの口を噤んでいたように（伊勢物語東下り）、清少の才筆一管に後宮の期待はかけられているのだろう。石田稷二氏がこの作品を定子後宮の文明記録として観なおしたいと提言された（『枕草子』三省堂刊『日本文学講座』3所収）のもこうした点と関連があるだろう。

ともあれ、後宮の人々の期待と要求に應えてまとめられたものだけに、大進生昌に対する如き折々の逸脱はあるにしても、ある意味では、定子後宮の共通感情を表現したものであるがゆえに、作者自身が予期した以上の好評を得たのではなからうか。「世の中にをかしきこと、人のめでたしなど思ふべき」ことなどいうのも従来歌に詠まれていたことを指すのであろう。そうした伝統的な和歌そのもの、あるいは歌材として認められて来たものを選び出で集載したならば「思ふほどよりはわろし。心見えなり。」と誘られたらうというのである。ここには「五月の御精進のほど」の段にも見えるように、「文字の教知ら」ぬわけではなく、「春

は冬の歌、秋は梅の花の歌などをよむ」わけではないが、常に「歌よむと言はれし末々」であると意識している清少の顔が顕現しているのではないか。^{注1}父祖の面伏せになるようなことはしない、それでいて皇后様には一に思われたいとの気質も重なって、和歌の伝統を突き破る文体あるいは文芸様式の獲得に至ったのであろう。ただ、和歌には事毎に叛旗を翻えすという絶対否定の態度ではなく、彼女の感覚と生理の尺度に適えば和歌的なものも摂り入れながら、^{注2}しかしそれを超える視野と見識の広さを持つ積極的態度の帰結だったのである。『枕草子』の内容と文体が和歌よりは歌謡に近く、それゆえに歌謡に親炙していた男性——経房たち——によって流布しはじめたとの説にも、この辺で触れ合うののだろうか。

ともあれ、「ただ心一つに、おのづから思ふ事」とは前の「あやしき」こと、「いと物覚えぬこと」と同じことを意味し、この草子が非和歌的内容を含有することを指すものと思う。それは正しく伝統的古今和歌的美意識からは大きく拡がり、一見逸脱ともみえる（秋山虔氏「枕草子的美意識」——『枕草子必携』所収）『枕草子』独自の美意識を指すのである。述べたように、この美意識を支えるのは清少の感覚と生理しかない。——「ただ心一つにおのづから思ふ事」とはその間の事情の説明であらう。——衆に交えられながらも枕草子のもつ個性がここに認められる。

それにしても「たはぶれに書きつけ」たとは、敬愛措くあたわざる皇后様からの、せつかくの御下賜品に「たはぶれに書きつけ」とは、一応の謙辞とも受け取ることもできるけれど、本朝末

開の隨筆様式の散文を書いたという實際的意味を、裏返しているだけに余計に強烈な自信と矜持の心をこめて示しているとみるべきだろう。この強烈な自恃の心は、続く「物に立ちまじり……いやあやしうぞあるや」の屈折した表現にも共通するところである。だからこそ自信をもって、「げに、そもことわり、云々」といえるのだと思うし、少し遡るが「おのづから思ふ事」と記すときの「おのづから」にここで改めて注意する必要がある。清少納言が、「おのづから」によいと思うことは、同じ人間であるなら他の人にもよいと思われるはずだし、彼女が「おのづから」悪く思うことは他人にも悪く思われるはずだ、という、言ってみれば人間性にまで掘り下げた彼女の美論なのであって、万人共通の感受性を基盤にしたこの美学は、『古今集』以来の正統的和歌美学とは一致しないものである。ここに当代第一の文芸の權威を背負う和歌に挑戦する清少納言の姿勢の掘って来るところが明らかにし、この『枕草子』に記したところは他人に理解されるはずであるのみならず、和歌の權威によって压制歪曲された人間性回復の勇氣が共鳴を招くのも当然だ、と言っているわけも分る。すべては「おのづから」すなわち何の作為も偏見もなしに感じたことだから、ということを作品の何よりの支えにしていることに注意したいのである。繰返して言えば美しいと思ったことは何も和歌という表現形式に頼らなくても人に伝達することは可能だし、また、伝統的和歌作法はもとより和歌形式そのものを突き破るところに感覚感情を真に話写できると主張していることと解せられる。

諸本によっても、根本的な本文の異動をみない「春は曙」の段が、諸本ともに冒頭に位置することをここで考え併せるなら、「こうして開卷第一に、大胆に打ち出された新奇な世界は新文芸としてのこの草子全編を象徴するにふさわしい」といわれている（鈴木博士前引論文）ように、初段は述べたように、勅撰和歌の權威に挑戦を営むような清少納言の新様式創始の意気込みと態度を示すもつとも端的な具体例としての意義と性格を持つものだろう。たしかに、前述のように、およそ歌材にふさわしくない鳥や冬晨の寒さなどを大きく扱っていることともに、これまでにも言われてきているように、勅撰集の部立と異なって四季が対等の重みを与えられていること、さらにはこれも既に言われているように、勅撰和歌集の配列に倣ってこの「春は曙」の段から『枕草子』を始めていると思われるだけに、和歌（集）に対する諷諫の心を読み取れるからである。したがって、作者清少納言にとつて、そうした重みを持つ初段と、その意図を解説的に述べる跋文とで首尾照応させてあるのは、両者相前後して執筆配置したうえで、『枕草子』の本質を不言不語裡に諷解して欲しいと希ったがゆえではなかったろうか。

このような試解が成り立つとすれば、『枕草子』の文芸史的意義は二つの面で認められなければならない。

本来なら（變の）和歌において表現されるべきことを散文において表現した。この国で初めての隨筆散文を作ったという経験が文学史的意義の第一である。『枕草子』の散文中でも随想段は本質的には日記文学より和歌に近いものであろう。『蜻蛉』や『和

『泉式部』の諸日記よりいっそう主情性の濃い性格はここに胚胎するのだと思う。放恣性隨筆性などと呼ばれる性格はこれと関連する。反面、この作品が知性的であるのは、和歌文学に対する抵抗意識に因由を求められよう。例えば「木の花は」の段特に梨の花の条がそれを充分に説明してくれる。

勅撰和歌の常識を破る心象風物の扱いもこのように理解すべきことと思うが、自己の感覚と生理を基準に表現することは、たしかに抒情の原初的な意義なのであるから、この作品を通して具体的に示し、跋文において立言的に示した意図は、歌材を固定し感覚を歪曲するような、いわば硬直した『古今』的和歌の伝統に有効なカンフル剤を与える結果となった。『枕草子』中には和歌からむ記述があつても、『万葉集』の歌については、『六帖』にも「桜麻のをふの下草露しあらばあかしてゆかむ親は知るとも」と採られた巻十一、二六八七番の歌を踏まえて「麻生の下草など口ずさみつつわがかたにくに」(七月ばかり…の段)とあるように舌端に思わず載せているときでも、これまた『六帖』に「時鳥いたくな鳴きそ独りるていの寝らえぬ聞けば苦しも」とある巻八、一四八四番大伴坂上郎女の歌を引いて、「いかなる人か、いたくな鳴きそ、とはいひけむ」(賀茂へ参る道に…の段)とか、これも『六帖』にある沙弥満誓の歌(卷三、三五一番)を引いて「跡の白浪はまことにこそ消えて行け」(しちとしまじきもの…の段)とかのように感想を述べるばあいでも、いずれ肯定的に受容しているものが多いようだのに、『古今』以後の歌になると、「天の川原、たなばたつめに宿借らむ、と兼平がよみたるもをか

し」「飛鳥川。淵瀬も定めなく、いかならむとあはれなり。」さらには「みちのくにありといふなを名取川なき名とりては苦しかりけり」(『古今』卷十三)の忠岑歌を捉えて「名取川、いかなる名を取りたるならん、と聞かまほし」(いずれも「川は」段)と述べ、あるいは「見る物は」の段で「千早ぶる賀茂の社のゆふだすきひとひも君をかけぬ日はなし」(『古今』十一詠人不知)「風吹けば峰に分るる白雲のたえてつれなき君が(人の)心か」(『古今』卷十二忠岑)の両者を引いて、「賀茂の社のゆふだすき、とうたひたるはいとをかし」「峰に分るると言ひたるもをかし」と述べ、「社は」の段でも「ねぎごとをさのみ聞きけむ社こそ果はなげきの森となるらめ」(『古今』卷十九讃岐)、「我が庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」(『古今』卷十八詠人不知)の両首を引いて、「ことのまま明神、いとたのもし。さのみ聞きけむ、とやいはれたまはむと思ふぞいとほしき」「折の御社はしるしやあらむとをかし」など述べているように、清少納言自身の尺度で「をかし」きもの、「あはれ」なるものと裁断しているのは、見てきたような『枕草子』創作の精神を説明する一助となり、「院の人も、花の衣に、などいひけむ世の御ことなど思ひ出づるに」(円融院の御はての年の段)とか、「姥捨山の月はいかなる人の見けるにか、など笑は給せふ」(御前にて人々との段)とか、「いとなほき木をなむおしをりためる、と聞え給ふに」(小白河といふ所は…の段)とかの歌は、それぞれに、「みな人は花の衣になりぬなり苦のたもとよかわきだにせよ」(『古今』卷十二遍昭)、「わが心慰めかねつさらしなやをばすて山に照る月を見

て」(『古今』巻十七詠人不知)、「直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなさ」(『後撰』巻十六高津内親王)というような著名な和歌の心を自家薬籠の内に収めていた後宮サロンの人たちの生活の反映として理解すべきことであるし、それに、いわゆる日記的章段をみるに、単に和歌的でなく、漢籍唐詩類の教養の高さを文化的な理想としている彼女があり／＼と分るのであって、表面一という字すら知らぬ態を装った『紫式部日記』の記すところと思い合わせると、それが文学においては、『古今』和歌的な伝統と情勢を超越しようとする態度に通じていくことが分る。

ともあれ、『枕草子』が超和歌的態度で、硬直化する当代和歌美学に批判を示したことが文芸史的意義の第二であり、それは、後日、『後拾遺』に至って桃の花の頌歌が初めて勅撰集に掬い上げられてくること、その他前節前々節で述べた事実と無関係ではないだろう。そしてまた、『枕草子』を所持して、いわゆる伝能因本を伝えた能因法師が、「心あらん人に見せばや津の国の……」と強い信念をもって、旧来の和歌美学に対したことを思い合わせると、『枕草子』の精神が肯定的に受けとめられた和歌史の一例を見出すことができようと思うのである。

注1 三巻本にのみ伝えるつぎの一段も同じ態度からの文章として理解できよう。

「九月二十日あまりのほど、初瀬に詣でて、いとほかなき家にとまりたりしに、いと苦しくて、ただ寝に寝入りぬ。夜ふけて、月の窓よりもりたりしに、人の臥したりしどもが衣

の上に、白うてうつりなどしたりしこそ、いみじうあはれとおぼえしか。さやうなるをりぞ、人、歌詠むかし。」
注2 例えば、藤の花については、和歌と殆んど同じ角度で捉えている。

附

本稿はもともと、源氏物語心象研究の一環として出発したが、枕草子との比較という方法に重点を置いたため、第三節を付して結果として枕草子私論の形となった。紙数の都合から説明に都合のよい事例若干を挙げたが、一層細密な調査結果とともに、『枕』と『源氏』とに共通する素材となっている風物などについても、別の機会に補充したいと思っている。

「国文学研究」投稿規定

- 一、投稿論文は原則として、四百字詰原稿用紙三十枚以内とし、別に八百字程度の要旨を添えること。
- 一、投稿論文には住所・卒業年度・職業を明記すること。
- 一、投稿締切日は、前期号〓二月十五日、後期号〓八月十五日とする。
- 一、採否に関しては編集委員会に一任されたい。
- 一、現期の編集委員は次の十名である。
国東文麿、井上宗雄、上野理、榎本隆司、小林保治、後藤良雄、佐藤陸、神保五弥、林勉、山崎正之。